

視点・方法にもうひとつ全体を貫く「共有されるべきスキーム」が示されていたなら、読者にとっては一層好都合であったように思われる。個々の教育現象の「読み解き」は、社会現象としての「読み解き」の視点を忘れてはならない。その点で四章で取り上げられている視点と九章の内容及び「読み解く」手法は大変示唆的であり、新鮮である。本書は「教育」に関心を寄せる者にとって、時宜を得た啓発的役割を果たしてくれるであろう。

森田洋司総監修

『世界のいじめ——各国の現状と取組』

金子書房、1998年

新富康央（佐賀大学）

「どうしていじめの」。わが国のいじめ問題は、いっこうに衰えを見せない。しかし、「いじめ」はわが国固有の教育問題かと言えば、そうでもなさそうである。数年前、アメリカのインディアナ大に留学中も、日本の研究者ということで、やはりいじめ問題についてしばしば質問された。しかし反面、これがわが国固有の問題でないことも知った。アメリカでは「虐待」という言葉にはシビアに反応する。だが、事実としていじめが存在するのに、ある意味で共通の根を持つはずの「いじめ(bullying)」という言葉には、社会的関心がそれ程高くない。他の留学中のヨーロッパの若い社会学者も、異口同音にその点を嘆いていた。

この体験により筆者も、いじめ問題を国際的に捉えることの必要を痛感するようになった。国際的な視野による研究が、わが国において待たれるところであった。こうした中、いじめ問題に関する世界的なコンセンサスを求めて、森田洋司氏総監修になる「各国の現状と取組」という副題が付された本著が出版された。

次の4点が、従来のいじめ問題の研究書にはない特徴として、指摘できよう。

(1)本書は、P・K・スミスやD・オルブェウスなど、いじめ問題研究に関する世界的な権威者を一同に集めて、第1章オーストラリアにはじまり、中近東・アフリカ・ラテンアメリカの最終章まで22章に渡って、各国でのいじめの定義やその現状と対策への取組がコンパクトにまとめられている。これほど大がかりな国際的規模の研究プロジェクトは、これまで例を見ないであろう。

(2)国際比較であるから当然、いじめ問題の各国間での共通性と固有性が論点となる。その点、本書は特に、最近まで等閑視されてきたいじめ問題の「共通性」に着目する。いじめは一つの社会的行為とみた場合、社会の歪みに起因する普遍性を持つ故に、その攻撃的・反社会的行動を助長させたり抑止させたりする要因や原則は、文化的な差異を越えて共通している。しかし、森田氏が指摘するように、従来どちらかと言えばわが国では、「いじめ問題はわが国固有の問題であるかのような思いこみが見られ」ていた。そのため、世界的規模で進んでいる共通の現実としてのいじめ対策の研究が、疎かにされてきた点は否めない。

(3)したがって本書では、各国でのいじめ問題に対する防止への取組状況（いじめ防止プログラム）が多数紹介されている。ピア（Peer）・サポート・プログラム、ピーカス法とその修正であるファースタ法、シェフィールド・プロジェクトなどの技法の、各国での開発と取組状況を知ることができ、大変興味深い。

(4)こうした世界的な規模の研究プロジェクトとなると、そのマイナス面として「総花的である」と評するのが、書評の常とう句である。だが、本書はその難を少なからず逃れている。総監修者森田氏の周到な企画・計画により、考察の基準となる比較点がきちんと整理されている。そのため、各国に割り当てられた少ないスペースにもかかわらず、国別に多少の差はあるものの、各国のいじめ問題とその取組状況について、かなりつこんで論究されている。少なくとも、各国の研究者の、いじめ問題解消への並々ならぬ意欲が我々に伝わってくる。

ここで、本研究に対するさらなる期待を、2点ほど述べさせてもらいたい。

(1)いじめ問題の共通性を研究の基盤に据えていながらも、実際は各国でのいじめの定義一つ見ても、幅広い。曖昧である。やはり、社会的・文化的な背景を異にすれば、「いじめ」の言葉の持つ語感やイメージは異なる。アメリカでの拙体験でも、bullyingというアングロ・サクソン系の言葉を共有語とする故に、却って日本のいじめ（ijime）問題が伝わり難い歯がゆさを感じた。①仲間だからいじめる、②いじめの匿名性や暗数化（特定の困難さ）、③いじめの被害者が必ずしも社会学で言う社会的弱者ではない、④傍観者も被害者から見れば加害者となる構造などは、彼らのbullyingの概念からは容易に理解できない。煩雑な作業となることを承知で言えば、むしろ固有性を生んでいる社会的、文化的差異に関する比較考察的アプローチを積むことによって、いじめ問題の「普遍性」に迫れないかと思う。(2)日本のいじめ問題の研究上の固有性は、第一に現象学的なとらえ方にあるだろう。つまり、第三者によるいじめ判定ではなく、被害者自身のいじめへの認知をいじめの発生と捉えている。研究の国際化が叫ばれる中、世界的な規模の本研究をこの観点からもリードして欲しいと思う。

いじめの予防と解消のために、まさに全世界の英知を結集した本書である。研究者だけでなく、すべての学校・教育関係者にとっても必読の書と言えよう。